



## 国語、数学Ⅲ 問題

はじめに、これを読みなさい。

1. この冊子には、「数学Ⅲ」と「国語」の問題がおさめられている。「数学Ⅲ」は表面から10ページ、「国語」は裏面から21ページである。必要な科目を選択して解答すること。なお、表紙の次の白紙2ページはメモ用紙として使用してもよい。
2. 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合して確認すること。
3. 監督者の指示にしたがい、解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
4. 解答用紙の「解答科目マーク欄」にマークし、「解答科目名記入欄」に解答する科目名を記入すること。マークされていない場合、または複数の科目にマークされている場合は、この時限の科目は採点対象外となる。
5. 解答は、すべて解答用紙の所定欄にマークすること。
6. 1つの解答欄に2つ以上マークしないこと。
7. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入のこと。
8. 訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
9. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
10. 解答用紙はすべて回収するので、持ち帰らず、必ず提出すること。
11. 問題冊子は、必ず持ち帰ること。
12. 試験時間は、60分である。
13. (数学Ⅲ) 分数形で解答する場合は、既約分数で答えること。
14. (数学Ⅲ) 根号を含む形で解答する場合は、根号の中に現れる自然数が最小となる形で答えること。
15. マーク記入例

良い例	悪い例
	

に

国語問題

(解答番号 1～29)

はじめに裏返して、表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. 「国語」の問題は21ページあります。
2. 「数学Ⅲ」の問題は反対の面にあります。





(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

人類史上、想像もつかなかったような巨大な「世間」<sup>1</sup>ができあがったのは二十世紀になってからの放送メディアの登場だった。放送のおかげでわれわれの「世間」はかつて想像することもできなかったほどひろがったのである。マクルーハンはそれを「人間拡張」と名づけたが、「世間」<sup>\*</sup>と「人間」は同義なのだから「世間拡張」といつてもいい。とにかくわたしたちすべてが共有できるような、いや、共有せざるをえない「ひろい世間」のなかに放りこまれたのである。

ラジオ放送というものがはじめて実験されたのは一九〇六年、フェッセンデンというアメリカ人によるものだったというが、その後二十年ほどのあいだにラジオ受信機というあらたな耐久消費財が発売され、先進国を中心に各家庭で聴かれるようになった。

こまかい歴史は省略するが、その強力な放送メディアにさいしよに注目した政治家のひとりヒットラーであった。かれの腹心の盟友、ゲッベルス<sup>3</sup>は一九三三年にナチ政権発足とともにラジオ放送局を国営化し、みずから「国民宣伝省」長官になって連日プロパガンダ放送をおこなった。ナチ政権はラジオとともににはじまり、ラジオによってその基盤を確実にした、といつてもよい。かれらが政権確立とともに放送局を占拠した、というのはじつに鮮やかな戦略であった。ラジオは単純明快なことばでドイツ国民を心理的に完全に「洗脳」してしまった。ほかに情報源がなくなれば、人間の思想や行動はわずかな時間でかわってしまうものだ。わたしたちだって、新聞、放送が口をそろえておなじことをくりかえせば、いつのまにやらなんでも信じてしまう。歴史の改竄<sup>かいざん</sup>だって、真実だと思いついで疑うことを知らない。それを徹底的に実行したのがナチであった。<sup>\*</sup>ハーストの新聞による大衆操作もひどかったが、ナチのラジオ利用はそれをはるかに上回るものだった。

さらにゲッベルスがプロパガンダの達人として偉大だったのは、当時まだ不足していたラジオ受信機を大量生産して各家庭への浸透をはかったことだ。ゲッベルスは技術者を督励して「国民ラジオ」(Volksempfänger)の開発をおこない、安価で性能のいいラジオが量産されることになった。その結果ドイツでのラジオ普及率は一九三九年には世帯の七十パーセントをこえた。こう

して天下無敵の巨大な「世間」ができた。そのスピーカーからはヒットラーの演説から愛国歌謡にいたるあらゆる世間話がきこえてくる。「国民自動車」(Volkswagen)はいまもその名をとどめる世界有数の自動車会社としてアウトバーンとともにナチの遺産になっているが、「国民ラジオ」もまたたいへんな現代遺産だったのである。

ほぼ同時期に、アメリカもまたラジオの力に着目して、受信機の普及と電波の政治的利用をかんがえはじめた。ナチ・ドイツのようにあからさまな放送局の国営はできなかったが、軍事予算を迂回<sup>うわが</sup>させてRCAという会社をつくった。放送内容はニュース、音楽などが中心だったが、このラジオを利用することをかんがえたのがルーズベルト大統領である。かれは「炉辺談話」(Fireside chat)と名づけた定時放送で直接に国民に語りかけた。題名がしめすように、これは演説<sup>4</sup>という気張ったものではなく気楽なおしゃべり、という趣向。これで大統領と国民のあいだの距離はちぢまり、戦争中のアメリカの世論と士気を高めた。「炉辺談話」がはじまったのは一九三三年。ゲッベルスによる「国民ラジオ」の構想とまったく同時代であったことは象徴的な符合<sup>5</sup>というべきであろう。

ひとことでいえば、「交際圏」すなわち「世間話」の輪は、ラジオという新発明品のおかげでついに「国家」というタガのなかにすっぽりと包みこまれ、ひとびとはラジオの意のままにうごくようになってしまったのである。

ヒットラーとルーズベルトというふたりの象徴的リーダーのラジオ利用をみて、他の国もラジオのおどろくべき効果に気がついた。イギリスはBBCをつくり日本では大正十五(一九二六)年に日本放送協会、すなわちNHKが発足していた。ひとことでいえば、放送<sup>6</sup>というコミュニケーション手段の実用化と「国家」とがセットになって二十世紀初頭の世界に登場したのである。この大変動は劇的であった。

かなり時間がたつてからラジオを導入した途上国での世間の変化もおどろくべきものだった。たとえばラーナーの調査によると、一九五〇年代のはじめのレバノンでは、<sup>7</sup>それまでなにか問題がおきると村の長老の意見にしたがって行動していた村人たちが、ラジオの導入とともにだんだん「政府」のいうことをきくようになった。具象的な「顔」はみえないが「声」はきこえる。ひとびとはその「声」をつうじて想像もつかないような「ひろい世間」を知り、同時にそれが「国家」というものであることを知ったのであ

る。いいかえれば、ラジオこそがナショナルリズムの確実な基盤を用意してくれたのである。特定の国の特定の言語による放送によって「国民意識」がはっきりできあがってきた。誇張していえば「ラジオの誕生」は「国民意識の誕生」だったのである。じじつ、いま世界には二百余の「国家」があるが、その半数以上の放送局は完全な国营事業である。

もちろん、(中略)新聞という強力なメディアはあった。しかし、同時刻に同一の情報に数百万数千万の「国民」が接触する、というおどろくべき時代がやってきたのである。新聞はそれを購読しないひともあるし、主張もさまざま。なによりも文字の読めないひとには無縁の存在であった。しかしラジオから流れでる声はすべてのひとびとに同時に到達する。

それに電波というメディアの性質から、周波数割り当ては国際機関によっておこなわれ、放送局の設置は各国政府による許認可制によって管理されることになったから放送は程度の差こそあれ

は イ 的にならざるをえない。そんなふうにして、われわれは放送をつうじて背後に見え隠れする「国家」という巨大

な「交際圏」のなかに組み込まれたのである。テレビの登場は「有名人」の「顔」もみせるようになったから、放送の威力はさらに加速した。

SNSの登場でマス・メディアの力が減少した、という説がある。たしかにネット端末が世界中で五十億台あるというのは事実だろうし、それが百億台になることもあろう。だがそれは五十億人が歯ブラシをもっている、というのに似ている。あんまり意味のある数字ではない。五十億人が同時に、しかもいつせいに同一情報でつながっているわけではないからである。じつさいのSNSはせいぜい数百人をつなげるネットワークであるにすぎず、この五十億という数字だってマス・メディアがとりあげてはじめて全世界が知ったのである。局地的に、そして一時的になにかが「炎上」したって、そんなものマス・メディアのおおきな手のひらのうえでアリが一匹、ちよつとうごいたようなもの。それにSNSが語る内容はマス・メディアからの引き写し。あるいはマス・コミ批判。なによりも多いのが放送・出版の前宣伝。SNSはマス・コミに寄生しているだけなのである。そうおもったほうがいい。

(加藤秀俊『社会学』による)

注

\*「世間」と「人間」は同義……「世間」も「人間」も人と人との間に生まれるという意味で同語源だということ。

\*ハースト……(一八六三—一九五二)アメリカの新聞王。センサーシヨナルな報道をするなどして大衆紙を確立させた。

問一 傍線1「世間」の本文中の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 1。

- A それぞれの人が、税金を納めることによって所属することを許される範囲
- B それぞれの人が、自分たちがつながっていると感ずることのできる範囲
- C それぞれの人が、相互にコミュニケーションを図ることのできる範囲
- D それぞれの人が、家族より大きく世界より小さいと想定している範囲

問二 傍線2「わたしたちすべてが共有できるような、いや、共有せざるをえない『ひろい世間』のなかに放りこまれたのである」とあるが、それはなぜか。理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 2。

- A 放送メディアが全世界でプロパガンダを行い、大衆操作に力を貸すようになったから。
- B 放送メディアが、限られた情報を同じ時刻に圧倒的な数のひとびとに一方的に伝えるようになったから。
- C 放送メディアが、「世間」についてのわたしたちの知識を想像もつかなかったほどひろげるようになったから。
- D 放送メディアが「声」によって、新聞とは比較にならない膨大な情報をひとびとに与えるようになったから。



問三 傍線3「一九三三年にナチ政権発足とともにラジオ放送局を国営化し」とあるが、当時のナチ・ドイツとアメリカにおけるラジオの利用の方法にはどのような違いがあったか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 3。

- A ナチは改竄した歴史を国民に広めたが、アメリカでは虚偽内容の放送をせず大統領の人柄が伝わるようにした。
- B ナチはラジオを国民に安価で提供したが、アメリカは高性能の製品を普及させ大統領と国民の距離をちぢめた。
- C ナチはプロパガンダ放送を積極的に行い、アメリカは一見非政治的な内容の放送を行った。
- D ナチは放送局を掌握し国の事業として放送を行ったが、アメリカでは放送局は国からの独立性を保ちながら放送した。

問四 傍線4「演説という気張ったものではなく気楽なおしゃべり、という趣向」によってどのような効果があったのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 4。

- A 「国家」と「国民」との親密さが増し、ひとびとは「国家」の思うように行動するようになった。
- B ひとびとはルーズベルトに直接的に語りかけられていると錯覚し、ついには彼を大統領に選出した。
- C ルーズベルト大統領の人柄のよさをひとびとが感じとり、彼を知らないうちに敬愛するようになった。
- D ヒットラーの演説とは異なり、ひとびとは自分の意思で「世論」を形成するようになった。

問五 傍線5「象徴的な符合」とあるが、何を象徴しているというのか。次の中から最も適切なものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 5。

- A 両国が、当時の情勢の中、主義は違っても、国民を誘導し意のままに動かすという共通の方法を考えていたこと。
- B 両国が、対立していたにもかかわらず偶然似たことを考えていたように、意外なことはいつでも起こりうること。
- C 両国が、世論と士気を放送によって高めたため、このあと戦争に突入したときに順調に勝利を収めていったこと。
- D 両国が、国家と国民との距離を近づけていったことにより、後の日本との戦争において大きな影響があったこと。

問六 傍線6「放送というコミュニケーション手段の実用化と『国家』」がセットになって二十世紀初頭の世界に登場した」とある

が、それはどのようなことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 6。

- A ラジオによってナショナルリズムの基盤が用意され、さらにテレビによって「国民意識」が盤石になったということ。
- B 周波数の割り当ては国際機関によっておこなわれ、放送局の設置には「国家」の承認が必要だったということ。
- C 「国家」の重視するメディアが新聞からラジオへと劇的に変化し、誰もが「国民意識」に陶醉したということ。
- D 大量のひとびとを操作するために「国家」が放送メディアを利用することが不可欠となったということ。

問七 傍線7「それまでなにか問題がおきると村の長老の意見にしたがって行動していた村人たちが、ラジオの導入とともにだんだん『政府』のことをきくようになった」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **7**。

- A 村の長老に現実的な指導力は感じるが、声だけのラジオ放送が国家に対する畏怖を感じさせるようになったから。
- B 世間の頂点は村の長老だと思っていたが、世間が広くなったため世間の頂点は政府だと認識するようになったから。
- C 尊いものとされていた村の長老の話が、村人が幅広い情報を得たため、陳腐に感じられるようになっていったから。
- D 政府のプロパガンダ放送により村の自主的活動が封じ込められ、村人たちは国家に忠誠心をもつようになったから。

問八 空欄 **ア** と **イ**

をマークせよ。解答番号は **8**。

に当てはまる語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号

- A ア 排他                   イ 確定
- B ア 安定                   イ 一般
- C ア 独占                   イ 限定
- D ア 局地                   イ 全体

問九 傍線8「それは五十億人が歯ブラシをもっている、というのに似ている」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 9。

A SNSは影響力においてマス・メディアと拮抗するという説があるが、いずれもその影響力は大きなものではないから。

B SNSは局地的なものであり、不特定多数へいつせいに同一の情報を発信するマス・メディアとは比較にならないから。

C SNSがどんなにマス・メディアを攻撃したところで、大きな手のひらの上でアリが一匹うごいているようなものだから。

D ネット端末が世界中に五十億存在するということは、マス・メディアによって初めて全世界の知るところとなったから。

(二) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

書について芸術性を問題にするということはごく普通に行なわれていることだろうが、私にはこの問題について確たる意見をのべることができない。もし絵画について芸術という言葉で語ることができるなら、書についても同じことができないはずはなからうと思ってみるのだが、ごく単純なところでこだわりが生じ、思考が立ちどまってしまふ。つまり、絵画では、ある種の例外的営みを除けば、同じ箇所を何度も塗り重ねることが当たり前のこととして行なわれるのに対し、書では墨の塗り直しは許されないという事実、私は両者の本質的な違いを感じてしまうからである。もつとも、書でも意識的に塗り重ねをする場合も、あるいはあるのかもしれない。書と画とが相接し、重なり合つてさえているような領域の仕事も、あるいはあるのかもしれない。しかしそれは、書の長い歴史の中ではまったく例外的な現象だろうから、私の狭い<sup>①</sup>チ見の範囲には入つてこない。

だが、別の見方からすれば、塗り直しがきかないということは、芸術というものをその行為態において見るときには、むしろ芸術の最も徹底したあり方としての一期一会<sup>いちいちえ</sup>の精神、その一回性を峻烈<sup>しゅんれつ</sup>に表現しているものと言うことができるだろう。

書はその観点から見ると、芸術の王座に位置すると言つても過言ではないのである。

書にはこのような二面性が備わつていて、それがたぶん昔も今も書を見る人——それは潜在的には一人残らず書をする人でもある——をひきつけてやまない書の秘密なのである。

以前にも私はこのことについて考えたことがあつたが、そのとき私の頭に浮かんだのは、書と舞踏との類似性ということだつた。音楽、絵画、彫刻などにおける作品と作者の関係を考え、それを書の場合と比較してみると、後者は前者に比べ、作つた人と作られたものとの関係が比較にならないほど密接だと感じられる。これに似た関係を考えてみると、おのずと舞踏が念頭に浮かんでくるのである。

もちろん、書は、それが書きあげられた後には一つの「もの」として残るのに対し、舞踏は一瞬一瞬に消滅してしまふという大きな違いはある。しかし、書を書く人の心の問題としてこれを考えてみると、人を震撼<sup>しんかん</sup>させるほどの書を書く人は、「もの」とし

て残るものを書こうとして書くのではないだろう。彼らは、書くことに没頭しているとき、一瞬ごとに筆尖からほとぼり出て消滅してゆくおのれ自身の命のキ跡<sup>②</sup>を、あたかも運動そのものに魅了されつくした舞踏家が空間に一瞬一瞬おのれの命の形を刻みこんでゆくように、

ア

だけではなからうか。

何よりもまず、舞踏家においても書人においても、一つの動作はやり直しがきかないものとして、一瞬に全体が通過してしまふものとして、そこに出現し、同時に完成してしまう点が共通しているのである。

その点では、書にも舞踏にも、武術に共通したところがあるように思われる。命の発現には一刻の猶予もないというのが、これらの諸術に共通の心得というものだろうからである。

だからこそ、常住坐臥<sup>ざが</sup>が修業となる。どの一瞬をとつてみても完結していなければならぬ——あるいは否応なしに完結させられてしまう——のが、言葉の真の意味における生の一回性というものであるからだ。書家とよばれる人々については知るところがほとんどないからふれるわけにいかないが、広い意味で書人とよばれる人々——別の言葉で言えば文人だったり画人だったり学人だったり道人だったりする人々——の場合、今のべたような意味で常住坐臥を書の実践としている人々の書が、江湖<sup>きょうこ</sup>に尊ばれ、好まれるものでもあるのがほとんどである。書の一<sup>1</sup>回性の背後には書<sup>1</sup>の無限の繰り返しが透けていなければならないという<sup>1</sup>のが、逆説でも何でもなく、書の魅力の秘密だからである。

たとえば白井晟一<sup>しんいち</sup>の一点の書の背後に、いったい何百、何千の同じ文字の連なりがあるかについて想像してみる。たぶんこの瞑想的な建築家の書齋には、表に出てきた一点の書と比べて何の変わるころもないと思われる作がうずたかく重ねられていただろう。それでも、ある一点は可とされ、他の多くの文字は否とされたのだろう。その決定を下した作者自身の、命のほとぼしり<sup>③</sup>がその判断の根本にはあつて、ヨ人の介在を許さない。その点に、書の神秘性がある。書が、言ってみればわれわれの眼前に具体的なものとして出現した生<sup>2</sup>の神秘そのものという側面をいつももっているのもそのためである。

『一切経<sup>いっさいきょう</sup>』五千四十八巻をたつた一人で書き上げたという藤原定信<sup>ふじのらだのしん</sup>の事蹟について読んだことがある(小松茂美『書のみかた』)。藤原行成<sup>ふじのらぎ</sup>五代目の子孫である定信は、もちろん十二世紀日本の代表的な能書家<sup>のうしよか</sup>だったが、四十一歳の時から始めて六十四

歳まで、二十三年かかって『一切経』を写し了えたという。左大臣藤原頼長の日記『宇槐記抄(台記)』に頼長みずから書きしるしたエピソードとして小松氏が書いているところによれば、いよいよ『一切経』写経の大事業を了えた定信が頼長邸を訪れると、頼長は齋戒沐浴して イ を着用し、定信を上座に坐らせた。そしてみずからはるか下座にさがって、うやうやしく礼拝し、面接したという。『一切経』を写し了えた以上、定信はすでに仏と同じであるという思想からである。

この話を、書に対する信仰というものが生きていた時代の一つのエピソードに過ぎないと言ってしまうと、それはそれだけだが、私は頼長ほどではないにしても、たとえば正岡子規と彼の書いたものすべてについて考えるとき、これに似たような尊いものを前にしている感動を覚えずにはいられない。

<sup>3</sup> 正岡子規は三十五歳で世を去ったが、その書き遺したものは歴大だった。しかもそれらは——彼の生きた明治の世にあつては当然だったが——毛筆で書かれた。彼が書いたものの中には、俳諧、漢詩、和歌、散文などのほかに、まさに気も遠くなるばかりの量の、他人の作の書写も含まれていた。その最大のもの、晩年の言語に絶する苦しい病牀生活の中でさえ続けられた『俳句分類』だが、それ以外にも彼は、メモ魔と言つていいほどに、気安さと注意力の合体した異常なエネルギーによつて、多様な領域の文化的産物の引き写しと分類を不断に行なつていて、それらだけでも驚<sup>④</sup>タンすべき分量に達している。

特にこれらの記録について言えることだが、子規はこの仕事に没頭しているとき、字の形を整えたり、その美的特質に心をわずらわしたりすることはなかつたろう。ひたすら一字でも多く、速く、しかし正確に、文字を書き写すことだけが彼の関心事だったはずである。つまり達意の文字であればよいという考え方が、彼のおよそ飾り気のない、好ましい文字の流れを貫いていたはずである。

この点については、私は以前にも何度か子規にふれた文章の中で書いたので、ここには『子規遺墨』(求龍堂)第一巻の(序文)の中で山本健吉氏が書いているところを引いておきたい。

子規の散文が、おそろしく飾り気のない、簡潔明晰な達意の文であるように、彼の書く字も劃の明瞭な、読み易い、達意の字である。松山出身三俳家の字を較べてみると、子規のだけが実用性に発した字のように見える。虚子の字には風流意識によるおのずからの崩れがあり、碧梧桐の字には専門書家意識によることさらに装飾化、造型化が見える。(中略)

では、子規の書蹟の面白さは一体何だろう。飾りのないその書蹟から浮び上ってくるのびやかな好もしい人柄というより仕方のないものだ。無飾、達意の字プラス・アルファなのである。それは如何に流麗で、巧みな字を書いても、浮び上ってくるとは限らない。また、改まった気持で色紙、短尺、半折などに書いたものより、別に何の成心もなく書いた尺牘などが、いっそう面白いことがある。私は子規の字は尺牘や日記や、あるいはまた特殊なものとしては、自筆の墓誌銘や、とりわけ絶筆の三句などが好きである。

書と人格を結びつける考え方は、たぶん古くからあり、特に禅僧の墨蹟をきわめて重んじるようになってからの日本では、この考え方はとりわけ馴染み深いものになっている。さらに、文人画と共に文人の書を愛する風潮が根強く普及してからは、書は人なりという考えは日本人にはきわめて親しいものとなっていて、山本氏の子規の書に対する見方もそのような思想的伝統の上に立って語られていると言っていいたいだろう。

今、禅僧の墨蹟についてはいざ知らず、文人の書の伝統は地を掃っていると云っても過言でない時代にあつて、私たちが書家ならざる書人の「書」を見るときには、どのような意味があるのだろうか。私にはそれについて客観的な物の言い方はできない。しかし、私が好ましく思う書について言うことはもちろんできる。そのさまざまな要素の中でもとりわけ重要なことは、書が書を超えた何らかの目的に向けて奉仕するために書かれているときにこそ、書は最も深い輝きを発するということである。実際、病牀六尺に呻吟する正岡子規は、一字でも多く書くことができたとき、みずからの命の延長と拡充の実感をありありと感じて欣喜したのだった。彼にとつては、字そのものではなく、字によって具体的に形をとつて発現するわが命の舞踏の表現こそ、その喜びの源泉だったのである。

(大岡信『ぐびじん草』による)



注

\* 江湖……世間のこと。

問一 傍線①～④のカタカナと同じ漢字を用いるものを、それぞれの群から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は①が

⑩、②が⑪、③が⑫、④が⑬。

- |   |     |   |         |   |           |   |         |   |           |
|---|-----|---|---------|---|-----------|---|---------|---|-----------|
| ① | 千見  | A | チ密な計画   | B | 価チある品物    | C | 愚チをこぼす  | D | 気配を察チする   |
| ② | キ跡  | A | キが熟す    | B | キをてらう     | C | 仏道にキ依する | D | キ道に乗る     |
| ③ | ヨ人  | A | 紆ヨ曲折の人生 | B | 給ヨが振り込まれる | C | ヨ金口座を開く | D | 名ヨな受賞     |
| ④ | 驚タン | A | 色彩の濃タン  | B | 悪事に加タンする  | C | タン願書を書く | D | タン正なたたずまい |

問二 空欄 ア に当てはまる文として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

⑭。

- A 時空を自由に舞っている  
B 空間をわがものとしている  
C 紙上に無心に彫りこんでいる  
D 華麗な筆さばきで美を競っている

問三 傍線1「書の無限の繰り返しが透けていなければならぬ」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 15。

- A その書を書き上げるまでに多くの修練を積んできたことが想像されるということ
- B 成功と失敗を繰り返しながら傑作へと近づいてきた証が見て取れるということ
- C 優れた作品はいつでも何度でも同じように再現されなければならないということ
- D 一書家を生み出すまでの何代にも渡る厳しい訓練の集積が推測されるということ

問四 傍線2「生の神秘そのもの」とあるが、その例として適切ではないものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解

答番号は 16。

- A 時には人を震撼させることさえあるということ
- B どの一瞬をとってみても完結しているということ
- C その人の非日常的経験が集約されているということ
- D かけがえない輝きを発することもあるということ

問五 空欄 イ に当てはまる語として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

17。

- A 刀剣甲冑
- B 狩衣装束
- C 金襴緞子
- D 衣冠束帯

問六 傍線3「正岡子規」の代表的俳句作品を次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **18**。

- A 遠山に日の当りたる枯野かな
- B いくたびも雪の深さを尋ねけり
- C 赤い椿白い椿と落ちにけり
- D 叩かれて昼の蚊を吐く木魚哉

問七 傍線4「別に何の成心もなく書いた尺牘などが、いつそう面白いことがある」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **19**。

- A 折々の思いのまま書いた手紙のようなものにご書いた人の人柄がよく表れているから。
- B 単に書き散らしたメモ用紙や断片のようなものに、人一倍のユーモアが感じられるから。
- C 過去に専門的なトレーニングを受けていない方が、美しい文字を書くことができるから。
- D 特別な構成意識もなく書かれた書物には、踊るような喜びが表現されているものだから。

問八 傍線5「書家ならざる書人」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **20**。

- A 本来は書道家だが別に職業を持つている人
- B うまく書こうという意識を持たない書道家
- C 専門的に書道を学ぶこともなく筆を持つ人
- D 文筆家ではないが必要に応じてものを書く人

問九 傍線6「一字でも多く書くことができたとき、みずからの命の延長と拡充の実感をありありと感じて歓喜した」とあるが、

その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 21。

A 病人には文字を書くこと以外に自己表現の手段はないが、それを続けていくことが病からの回復へとつながったから。

B 一字一字書けるということは命を永らえることであり、執筆継続の可能性を広げることであつたから。

C 苦痛の合間に字を書くことこそが生きている証であり、またそこにみずからの生きる意味を見出すことができたから。

D 一字でも多く書くことは後世の人へ自分の思想を伝えることになり、生の痕跡をこの世に刻むことになるから。

問十 本文のタイトルとして最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 22。

A 書に生きる

B 書は命の舞踏だろう

C 書道の復権をめざして

D 作者の分身としての芸術

(三) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

俊蔭の娘(尚侍)に思いを寄せる帝(上)はその姿を一目見るべく思案している。

上、「いかで、この尚侍御覽ぜむ」と思すに、「大殿油、物あらはに燈せば、ものし。いかにせまし」と思ほしおはしますに、  
螢、おはします御前わたりに、三つ四つ連れて飛びありく。

上、「これが光に、物は見えぬべかめり」と思して、立ち走りて、皆捕らへて、御袖に包みて御覽するに、あまたあらむはよかりぬべければ、やがて、「童部や、候ふ。螢、少し求めよや。かの書思ひ出でむ」と仰せらる。殿上童部、夜更けぬれば、候はぬうちにも、  
\* 仲忠の朝臣は、承り得る心ありて、水のほとり・草のわたりに歩き、多くの螢を捕らへて、朝服の袖に包みて持て参りて、暗き所に立ちて、この螢を包みながらうそぶく時に、上、いとく御覽じつけて、直衣の御袖に移し取りて、包み隠して持て参り給ひて、尚侍の候ひ給ふ几帳の帷子をうち懸け給ひて、物などのたまふに、かの尚侍のほど近きに、この螢をさし寄せて、包みながらうそぶき給へば、さる薄物の御直衣にそこら包まれたれば、残る所なく見ゆる時に、尚侍、「あやしのわざや」とうち笑ひて、かく聞こゆ。

X 衣薄み袖のうらより見ゆる火は満つ潮垂るる海女や住むらむ

と聞こえ給ふ様、めでたき人の物など言ひ出だしたる、さらなり、し出だしたる才など、はた、いとめでたく心憎き人の、そのかたち、はた、世に類なくいみじき人の、さる労ある物の光にほのかに見ゆるは、まして、いとなむ切なりける。上、御覽するに、譬ふべき人なく、めでたく御覽すること限りなし。かくて、いらへ給ふ、「年ごろの心ざしは、これにこそ見ゆれ。

Y しほたれて年も経にける袖のうらはほのかに見るぞかけてうれしき。

上、おはしまして、よろづにあはれにをかしき御物語をしつつおはしますほどに、夜暁になりゆく。鳥うち鳴き始めなどするに、上、「まれに会ふ夜は」と言ふことは、まことなりけり」などのたまふ。

(『うつほ物語』による)

注

\*童部……元服前の姿をした召使い。

\*かの書……『晋書』『車胤伝』の故事をいう。車胤は貧しくて灯火の油が買えず、夏は螢を集めた光で書物を読んだ。

\*仲忠の朝臣……藤原仲忠。尚侍の子。

\*朝服……朝廷に出仕する際に着る服。

\*まれに会ふ夜は……「一人寝るときは待たるる鳥の音もまれに会ふ夜はわびしかりけり」『後撰和歌集』(恋五・八九五・小野小町が姉)の四句目を引用している。

問一 傍線1について、「ものし」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

23。

A 気味が悪い

B 厭わしい

C 風流である

D 華やかである

問二 傍線2「見えぬ」、傍線3「よかりぬ」を正しく品詞分解したものを次の中から一つずつ選び、その符号をマークせよ。解答

番号は2が 24、3が 25。

- 2 A 動詞「見る」の未然形+助動詞「ず」の連体形  
B 動詞「見る」の連用形+助動詞「ぬ」の終止形  
C 動詞「見ゆ」の未然形+助動詞「ず」の連体形  
D 動詞「見ゆ」の連用形+助動詞「ぬ」の終止形
- 3 A 形容詞「よし」の連用形+助動詞「ぬ」の終止形  
B 形容詞「よし」の未然形+助動詞「ず」の連体形  
C 形容詞「よろし」の連用形+助動詞「ぬ」の終止形  
D 形容詞「よろし」の未然形+助動詞「ず」の連体形

問三 傍線4について、「うそぶく」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

26。

- A 生意気な態度をとる  
B 見えないように隠す  
C 口をすぼめて息を吐く  
D 無視してそらとぼける

問四 XとYの和歌についての解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

27。

A Xは尚侍の詠歌で、蛍の火に浮かび上がる自分を「潮垂るる海女」に喩えて謙遜している。Yは帝の返歌で、蛍の光のなかでわずかに尚侍の姿を見られたことが嬉しいと詠んでいる。

B Xは尚侍の詠歌で、帝と離れ涙に暮れて過ごす日々を訴えるとともに、海辺に住まう「潮垂るる海女」に同情している。

Yは帝の返歌で、尚侍を思いやりながら、その配慮を嬉しく思う心情を込めて詠んでいる。

C Xは尚侍の詠歌で、自分を恋い慕って泣いているであろう帝を「潮垂るる海女」に喩えている。Yは帝の返歌で、ようやく恋い焦がれていた尚侍の姿を揺らめく蛍の光のなかに見ることができた感激を詠んでいる。

D Xは尚侍の詠歌で、帝の薄情な気持ちを衣の薄さに、涙にくれる我が身を「潮垂るる海女」にそれぞれ喩えている。Yは帝の返歌で、片思いをしているのは自分の方だと詠んでいる。

問五 傍線5「切なり」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

28。

A 切なくも悲しい気持ちになる

B 身を切られるように辛くなる

C 素晴らしいと心に深く感じ入る

D 呼吸が苦しくてやりきれなくなる



問六 本文の内容に合致しないものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 29。

- A 仲忠は帝の気持ちを受けて水辺や草むらを歩き回って螢を捕まえ、集めた螢を帝に差し上げた。
- B 仲忠は螢を尚侍のところに持って行ったが、尚侍は几帳の帷子のかげに隠れたまま返事をしなかった。
- C 帝は、灯火の代わりに螢の光を用いて本を読んでいた車胤の故事を思い出してみよう、とおっしゃった。
- D 帝は「愛する人とまれに会っている夜に聞く鳥の声がやるせないというのは本当だった」と言われた。





